

アトリエ 琉游舎 だより 211号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2025年8月13日発行

文月のものよ五色の糸素麺

子規

●五色素麺は愛媛県松山の特産品です。この句も松山出身の正岡子規の作。文月は旧暦の7月、旧盆を境に暑さが和らぎ秋風が吹き始めるころ、今頃の季節です。夏バテで食欲が落ちた時に、素麺は胃に優しくつるっと喉元を過ぎる食感はまさしく夏の食べ物です。

●五色素麺は江戸時代に発案者の娘が伊予豆比古神社に参拝した際、五色の糸が下駄に絡みついたのを見て、父親に色を付けることを進言したことがきっかけと言われています。將軍吉宗は松山藩主から贈られたこの素麺を「美麗五色は唐糸の如し」と称えたと言われています。近松門左衛門は「五色素麺は食べるよりまずは美しさを楽しんでいる。よほどの珍客が来たときでなければ食べるわけにいかず、その時を食わずにずっと待っている」との言葉を残しています。こんなに昔から珍重された五色素麺も全国的には知られていないようです。

●私は幼少時代から素麺と言えば五色素麺しか思い浮かびませんでした。両親が松山出身であることで、親戚からの中元や取り寄せで送られたものと思います。東京に出てきて真白い素麺しかないのを知って驚いたものです。当時はお取り寄せや諸国物産展のようなものがあまりなかったのも、いつの間にか五色素麺は私の記憶や食卓からも忘れ去られていました。

●今は各地の名産が輸送と冷凍技術の発達で、何時でも何処でも取り寄せができます。かつて海なし県の栃木では、魚はマグロとゆでた烏賊やエビ、干物と塩鮭しか食べられませんでした。今はどこに出かけても食材は似たり寄ったりです。そこでしか食べられないものや風景や人情がその地方の強みのはずです。画一化され、地方が消滅した現在の日本で、地方再生はその土地に行かなければ見聞し味わえないものからしか始まれないと思いますが、もはや手遅れのようにもあります。

8月スケジュール

			木	金	土	日
			14	15	16	17
火 水						
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31
9月1日	2	3	4	5	6	7
						写経会 13時半から
8	9	10	11	12	13	14
	読書会 13時半から					

五色素麺



写経会

9月7日（日）
13時半から

関東平野の最北端に定住して9年が経ちました。平野と中山間地の境、ぎりぎり平野に属しているところです。近くの標高500mにも満たない羽黒山頂上から南を臨めば空気が澄んでさえいればスカイツリーや富士山まで見通せます。一方西から北に目を遣ると眼下に里山が連なり、その先には日光や那須の山から会津の山まで見渡せます。気候はぎりぎり関東（東京）の天気予報に準じているようですが、たまに福島県の天気予報に近いこともあります。ここは時により南東北にも、関東にもなる土地柄のようです。このような土地にはまた他所にない特別な風習や伝説も生まれるのでしょう。以前も触れましたが、8月1日に地獄の釜の蓋が開いて、ご先祖様が13日かけて墓から歩いて家に戻り16日にまた墓に戻って釜の蓋が閉じられるという言い伝えです。道中の食べ物として釜の蓋まんじゅうを供えるのです。これは栃木県北部だけの風習のようです。またクワガタムシをオニムシと呼ぶのもここら辺の方言のようです。戦国時代までは南の宇都宮氏と北の那須氏の勢力拮抗の最前線でした。また大和朝廷の最北端、蝦夷との境界だったこともあったようです。九尾の狐伝説がこの地にも残されています。九尾の狐は那須の殺生石が有名です。昔、美しい女性の姿に化身した金毛九尾の妖狐がインドや中国での悪事がうまくいかず日本に逃げてきました。狐は玉藻の前という名の宮廷婦人を装い鳥羽上皇に仕えて上皇の寵愛を得ましたが、陰陽師に正体を明らかにされたため、那須に逃げ込みました。長い戦いの後、上皇軍は狐を討伐しましたが、狐は巨石に姿を変え、邪気と有害なガスを出し続けました。数世紀後、ある僧侶が石の呪いを解こうとして法力で石を3つに打ち砕き、1つは会津に、もう1つは備前に飛んで、最後の1つは那須に残りました。これが那須に今に伝わる殺生石です。

一方殆ど知られていませんが、私の住まいの近くにある生駒神社(勝善様)の由緒書きでは「76代近衛天皇の時代に白面九尾狐が各地を荒らし回っていたところ、天皇は第3王子の勝善親王に討伐を命じ、玉田の地に本陣を構えたが、悪狐は大槻の山を住み家にして各地を荒らし回り、親王自ら陣頭に立ち奮戦するも、大きな槻(櫟の古名)、大槻の密林を利用し頑強に抵抗した。親王は夢枕に立った豊受姫命の『槻の木を斧で切りつつ燃やせ』の通りにすると悪狐はたまらず那須原に飛行して殺生石になった」とあります。親王が豊受姫命に感謝し玉田に建立した社が「生駒神社」です。親王が信仰し狐退治の心願を祈った神社が「石上神社」、豊受姫命のお告げで槻の木っ端を燃やすための石の釜は「釜石」として今でも大槻集落に伝えられ残されています。因みに私の住居の大字は大槻、すぐ隣の集落は玉田という地名です。那須と大槻・玉田の九尾伝説にどのような関連があるのかや、実際にあった歴史上の出来事を何らかの事情で言葉に残すことが憚られて、伝説となって語り告げられてきたのかは分かりません。神社の宮司さんや氏子の方、郷土史に詳しい人に聞いても分かりません。しかし伝説はそれを伝え続けようとした人々の意志です。そこに住む人々が何らかの事実を形を替えてでも伝えていく必然性があったから、今に伝えられているのです。荒唐無稽に見えるお話も、そこには人々の意志が連綿と紡がれているのです。これが永遠のいのちを繋げると言うことです。

私は二つの九尾伝説の連関や、如何なる歴史的事実が下敷きになっているかを解明する能力はありません。ただ二つの話とも朝廷が討伐軍を組織して、抵抗する九尾の狐を成敗したという話は共通です。ここから朝廷＝権力が、九尾の狐＝反逆者＝まつろわぬ人々を討伐し服従させたという事実が想像できます。征服者が抵抗者の霊を鎮魂し、服従した者の抵抗を抑え、征服者の治政を正当化するためには、形あるものとしての神社、僧侶などの宗教的権威、征服された者たちの存在の証としての記憶(伝説)と鎮魂が必要だったのでしょう。まつろわぬ者をまつろう者に転換させ、被征服者が自分たちの記憶(いのち)を繋ぐことを許容し、両者が共存共栄していく装置、それらが伝説という形をとって私たちにまで繋がられているのだと考えたいと思います。本来、征服者は抵抗する者の文化も記憶も根絶やしにしてきました。そして自らの行動の正当化の証として歴史を記述してきたのです。私たちが知ることのできる過去は征服者が記述した歴史なのです。

私たちが現在知ることのできる歴史は、時の勝者によって何度も上書きされてきたものです。上書きからこぼれ落ちた過去も日記などの形で私たちは知ることができます。ただそれらもやはり時の権力者に近い者たち(中央)の記述でしょうから、敗者や服従させられた者(周縁・地方)の歴史を現存する史料や遺跡から正しく読み取ることは困難です。だからこそ私たちは死者の声を聞かなければならないのです。8月は鎮魂の季節です。かつての辺境の地であったここでは、地獄の釜の蓋が開いて死者がそれぞれのかつての住まいに向かって歩いています。その中には九尾の狐の一族として成敗された霊も歩いているかも知れません。

人の住むところには人々を守護する神社があります。氏神や地主神が祀られる場所です。そこに生きていた者たちの記憶を伝える場所です。記憶の継承者が彼ら固有の神々を供養し感謝し願いを託す場所です。土地には土地の者だけの固有の過去(神)があるのです。権力者(中央)が正当化した正史(神)ではなく、周縁に生きる人々の記憶の底の過去(神)です。歴史事実と認識されることはなくとも、信仰や伝承や風習で今に伝えられているのです。長期間なぜその伝承が可能だったのでしょうか。それはそれぞれの地方(周縁)に住む人達が、その地を守ってきた死者と対話し続けてきたからです。中央(権力)によって正当化された過去は、地方(周縁)固有の過去の集積によって成り立っているのではなく、それらを抹消あるいは改竄することによって成立しているのです。中央によって剥奪され画一化された私たちの生活は、周縁を守護する死者(神)の声を聞き、対話することで、固有の生活と経済と文化を再興できるはずで、それが中央支配から脱却して、各々の周縁が独自のやすらぎの日々を可能にする地方再生の道ではないでしょうか。